

フランス王立絵画彫刻アカデミー議事録の検討 —宗教画にまつわる学生教育について—

Training in Religious Painting at the French Royal Academy of Painting and Sculpture in the Mid-Eighteenth Century

吉田 朋子

YOSHIDA Tomoko

1. フラゴナール《偶像に捧げものをするヤロブアム》が提示する問題

18世紀のフランス絵画を代表する画家の一人であるジャン＝オノレ・フラゴナール（Jean-Honoré Fragonard, 1732–1806）に、《偶像に捧げものをするヤロブアム》（図1）という作品がある。¹ 弱冠20歳の時の作品だが、壮麗な宮殿を下から見上げるような背景処理、破たんなく堂々とした人物表現などに、若い画家の技量が示されている。思い切って画面上部・下部を暗く沈ませ、明るい画面中央に視線を引き付けるようにする工夫も巧みである。高いところに設置された黄金の子牛の背後から垂れ下がる布や登場人物の服のドラペリー表現や劇的な身振り・表情なども歴史画家として必須の語法を使いこなせることを効果的にアピールしている。フ



（図1） ジャン＝オノレ・フラゴナール《偶像に捧げものをするヤロブアム》
1752年 115×145cm 油彩・布 パリ国立美術学校

¹ 本作品の基本的な情報については、(Cat.exp.) *Fragonard*, Galeries Nationales du Grand Palais, The Metropolitan Museum of Art, 1987-1988.

ラゴナールは風俗画・風景画で知られるが、本作品は彼の描いた数少ない宗教画の一つである。1752年にローマ賞コンクールに参加した際に制作されたものだ。18世紀に画家を目指す若者の大きな目標であった「ローマ賞」だが、その課題には宗教画が課されることもたびたびであった。

主題は旧約聖書列王記上 12-13 章からとられている。イスラエル王国分裂後、北イスラエルの王となったヤロブアムは民の心をエルサレムの神殿から離すために、金の子牛を二体造ってベテルとダンに置き、人々に偶像崇拜を強いる。ベテルに預言者が来てこの行動を諫める。ヤロブアムはこの預言者を捕縛しようとする。「ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって呼びかける神の人の言葉を聞くと、祭壇から手を伸ばして、「その男を捕らえよ」と命じたが、その人に向かって伸ばした彼の手は萎えて戻すことができなかった。神の人が主の言葉に従って与えたしるしが実現して、祭壇は裂け、その祭壇から脂肪の灰が散った」。²

フラゴナールが描いているのは、まさに伸ばした手が萎えてしまい、側近たちに支えられながらヤロブアム王が恐怖におののいている瞬間である。背景の祭壇も倒壊して煙がたちのぼっており、聖書のテキストの情報を適切に盛り込んでいる。

コンクールの課題として描かれた宗教画であるが、この作品がどのように制作されたのかを考えると、様々な疑問が生じる。まず、課題はどういった形で提示されたのかという点である。単に旧約聖書のテキスト該当部分だけが伝えられたのか、あるいは、描くべき内容について詳細な指示が与えられたのか。たとえば、ヤロブアム王はターバンを頭に巻き付けた東方風の衣装を身に着けているが、これはフラゴナールの創意なのだろうか。

また、本主題はそれほど描かれることがなく、かなりマイナーと言ってよい。この課題はいったいどのように選定され、参加者にはどの程度の聖書やキリスト教関連図像に関する知識が前提とされたのであろうか。

「ローマ賞」「グランプリ」はフランスのアカデミー学生を対象にしたコンクールである。この賞は18世紀には画家としての栄達の出発点となる制度だった。³ローマ賞のもとになったのは、1663年の素描コンクールである。翌1664年のアカデミー規約には、王の英雄的な行為を讃える主題を課して、年に一度賞を与えることが定められる。その後、1666年にローマにフランス・アカデミーが設置されると、コンクールの受賞者は優先的にここに送られて芸術の先進地であるローマでさらなる研鑽を積む機会を与えられることになった。アカデミーのコンクールが「ローマ賞」と呼ばれるようになるのはこのためである。

時代とともに形式も内容も変化し、1674年からは男性モデルのデッサンで一次選抜が行われるようになった。その合格者には聖書あるいは古代史をテーマとした作品制作が課される。聖書の場合は特に旧約聖書から選ばれることが多く、先行作例が少ないエピソードが選ばれるこ

² 「列王記上」第13章第4-5節、共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987年。

³ ローマ賞の概要については、Simon Lee, "Prix de Rome", *The Dictionary of Art*, J. Turner (ed.), London, 1996, vol.25, pp.637-638.

ともあり、《偶像に捧げものをするヤロブアム》はこれに該当する。若者たちの人生を賭けたコンクールで、課題はどのように決められ、参加者にはどういった指示が与えられたのであろうか。

また、制作者フラゴナールが当時どのような状況にあったかを考えると、さらにもう一つの疑問が生じる。このコンクールは王立絵画彫刻アカデミー付属学校に学ぶ学生を対象にしたものであった。しかし、フラゴナールは学校に登録した学生ではないのにコンクールに参加している。師匠のプーシェは「私の生徒なのだから問題はない」とフラゴナールに請け負ったとされ、コネでの参加であったようだ。⁴しかも、エントリーするだけではなくグランプリを受賞している。アカデミーの学校に学んでいないにもかかわらず、受賞に値する作品を制作できたのはなぜなのだろうか。一体、アカデミーの付属学校では宗教画制作に関する指導はどのようになされていたのであろうか。

上述の疑問を明らかにするには、18世紀のアカデミーが日ごろの活動の中で宗教とどのように関わり、宗教画制作についてどのような教育を施していたかを確認する必要がある。本研究では、アカデミーの活動に関する重要な一次資料である「王立絵画彫刻アカデミー議事録」を検討することとした。

2. 王立絵画彫刻アカデミー議事録に見る宗教への顧慮・学生教育

(1) 王立絵画彫刻アカデミー議事録と1752年の例

1648年に創立された王立絵画彫刻アカデミーは、18世紀には美術に関する制度の根幹をなしていた。⁵この組織の日常的な業務を記録したものが会合の議事録である。アカデミーは、原則として毎月最初と最後の土曜に会合を持つこととなっており、書記によって議事録が作成されていた。1648年のアカデミー創立時から1793年8月3日まで、記述の粗密に幅はあるものの空白となっている時期がなく、17-18世紀のフランス美術史の基本資料の一つである。⁶

今回はこの資料のうち主にフラゴナールがローマ賞に挑戦した1752年の前後10年を中心に1741年から1765年にかけての25年分を通覧することによって、アカデミーにおいて歴史画家、とくに宗教画を描くことのできる画家の養成がどのように行われたのかについて参考となる記述が見いだせるかどうかを検証した。議事録が伝えるのは抽象的な理想や議論ではなく、日常的な業務や事件である。だからこそ、具体的な活動の在り方を推測する資料となりえる。

⁴ Jean-Pierre Cuzin, *Jean-Honore Fragonard: Life and Work. Complete Catalogue of the Oil Paintings*, Harry N. Abrams, Inc., 1988, pp.15-16.

⁵ 王立絵画彫刻アカデミーの歴史と活動については、栗田秀法「王立絵画彫刻アカデミー：その制度と歴史」、『西洋美術研究』第2号、1999年、pp.53-71.

⁶ Anatole de Montaiglon (éd), *Procès-verbaux de l'Académie Royale de peinture et de sculpture (1648-1793), publiés pour la Société de l'Histoire de l'Art Français d'après les registres originaux conservés à l'Ecole des Beaux-Arts, Paris*, 10vols., 1875-1892. 以下の註では、煩雑になるため、この資料はP.V.と略する。

まず、具体例として、1752年の議事録の内容の概要を示す。資料の様相を理解するには些末な記述も含めて全文の翻訳を紹介した方が良いが、あまりに膨大になるため、適宜要約した。⁷

1月8日(土)：国王絵画コレクションカタログから、画家アルバーニについて朗読。新年挨拶状の受け取り報告。入会希望者の報告。老齢で体調不良のルモワヌを訪問する会員の指名。アカデミーの窓の下で下品に騒いだ学生のうち10人を3か月間出入り禁止と決定。

1月29日(土)：王室建造物長官に新年の挨拶に伺候したことの報告。入会希望者の作品審査と承認。新年挨拶状の朗読。ルモワヌの息子からお見舞いへのお礼。

2月5日(土)：国王絵画コレクションから、画家グイド・レーニについて朗読。アカデミーに寄せられた新年挨拶状のすべてに返信したことの報告。

2月26日(土)：ド・トロワ逝去の報告。建築家ボワフランの書簡体詩の披露。入会希望者の報告。病気のガロッシュへの訪問を決定。

3月4日(土)：コシャン(子)が講演。学生が巨匠を学ぶ際の段階などについて見解を示した。前年度会計を検証する委員を決定。月末土曜は受胎告知の祝日なので会合は前日に行う。役員は役割分担決定・前年度会計承認のために朝9時に集合。入会希望者の報告。昨年12月から出入り禁止になっていた学生について禁止を解く。

3月24日(金)：前年度会計の提示・承認。入会希望者の作品審査と承認。入会希望者の報告。アカデミーに寄せられた意見書の紹介と回答のための委員会の指名。アカデミーの居室点検。絵画作品の複製版画制作についての報告。病気のデュシャンジュへの訪問を決定。月初土曜は聖土曜日に当たるので一週間会合を遅らせることとする。

4月8日(土)：会員ガブリエルの子息にモデル・デッサンの教室に入ることを許可。前回紹介された意見書への回答案を検討し了承。グランプリに参加できる学生を決定(課題を審査した結果、絵画はコレージュ、サントーバン、モネ、フラゴナール、ペロネ、彫刻はデュエ、ブルネ、デュプレを選出)。入会希望者に前向きな返答をすることを決定。今月の役割分担をブーシェからナティエに交代。

4月29日(土)：ファヴァヌ逝去の報告。入会希望者の作品を審査し、了承。入会希望者の報告。ガロッシュが先日のお見舞いについてお礼。5月の仕事をナトワールからスロットに交代。

5月6日(土)：国王絵画コレクションのカタログに所収される画家伝とともにカラッチ一族についての論文を朗読。来週水曜に王室建造物長官来訪の伝達。病気のヴァンローへの訪問を決定。

5月10日(水)：王室建造物長官が就任後初のアカデミー訪問。ブルドンによる光に関する考察と古代彫刻をデッサンする方法についての講演を朗読。会長らが返礼に長官を訪問するこ

⁷ P.V., tome VI, p.301-341.

とを決定。今年はサロン（アカデミーの展覧会）を開催しないことを長官が決定。

5月27日（土）：主管（ファヴァヌ）逝去に伴う人事。パロセル、トゥルニエール逝去の報告。ヴァンローがお見舞いについてお礼。ロワ氏が画家コワペルへの賛辞を送付したことの報告。

6月3日（土）：コワペルから欠席連絡。ガロッシュの絵画論朗読（6月3日）。学生が古代彫刻の学習から自分で構図を作れるようになるまでの道筋についての考察を含む。かつてのアカデミー会員の子息から肖像画が寄贈されたことの報告。役割分担の報告。月末土曜が聖ヨハネの祝日なので前日に会合を持つことを決定。

6月23日（金）：アカデミー会長コワペル逝去の報告と書記の弔辞。コワペルのためにサン・ジェルマン・ロクセロワ教会でのミサ挙行の決定。人事異動は7月末に行うことを決定。アカデミーの居室点検。四半期ごとのメダル授与学生の決定。

7月1日（土）：ケリュス伯による衣装についての講演。故パローセルのデッサン遺贈。本日朝にコワペルのためのミサを挙行したことの報告。

7月29日（土）：会長選挙の結果シルヴェストルに決定。その他人事異動。複製版画の提出と認可。コワペルへの追悼の紹介。

8月5日（土）：コワペルの生涯について朗読。次回の会合でグランプリに参加する学生の絵画と浅浮彫を確認することを決定。パリ奉行から街灯の点灯担当が指名されたことの報告。准教授に関する古い規則を有効とする決定。

8月19日（土）：グランプリ参加学生の作品を確認し、聖ルイの祝日（8月25日）に公開して8月26日に審査することを決定。新会長が王室建造物長官に伺候したことの報告。故パローセルの肖像テラコッタの寄贈。

8月26日（土）：入会希望者1名の作品審査と正会員での入会決定。別の入会希望者1名は却下。グランプリ審査。課題は旧約聖書から「ダヴィデとアブサロムの和解」「偶像に捧げものをするヤロブアム」。作品Dのフラゴナールが絵画1等、作品Bのブルネが彫刻1等、作品Fのモネが絵画2等、作品Aのデュエが彫刻2等。王太子の快癒に感謝してサン・ジェルマン・ロクセロワ教会で荘厳ミサとテ・デウムを行うことを決定。

9月2日（土）：ワトレによる絵画についての詩の朗読。王室建造物長官により1751年度のグランプリの授与。絵画1等デエ、彫刻1等オーヴレ、絵画2等コレージュ、絵画2等デュエ。あわせて、1751年度四半期毎のプティプリの授与。翌3日に王室建造物長官に返礼に伺候することの決定。本日朝、王太子快癒感謝のテ・デウム挙行の報告。

9月30日（土）：今四半期の議決の読み上げ。正会員希望者の作品審査と承認。同業組合所属の画家のアカデミーへの移籍について審議。アカデミーの居室点検。クルタン逝去の報告。

10月7日（土）：ラファエロ《聖ミカエル》の状態と布への移し替えに関する議論。ポーランド王の大臣から一人の学生がパリ滞在の間にモデル学習することへの許可願いの紹介と承認。テ・デウムにかかった費用の各構成員の負担について報告。

10月27日（金）：土曜日は聖シモン・聖タダイの祝日であるため変更。画家アルバーニ伝の朗読。死者のためのミサをサン・ジェルマン・ロクセロワ教会で挙行することを決定。

11月4日（土）：ケリユス伯の絵画論を朗読。イエズス会員ドワッサン師から版画芸術についてのラテン詩をアカデミーに献呈希望という報告と承認。複製版画の提示と承認。本日前に死者のためのミサが行われたことの報告。

11月25日（土）：画家カラヴァッジョ伝の朗読。ケリユス伯の著作『古遺物集成』の紹介。

12月2日（土）：ウードリの絵画の実技と制作の三段階についての文章の朗読。

12月30日（土）：新年に王室建造物長官に挨拶に上がることを決定。プーシャルドンとサリーの1月の役割交代の了承。ナトワールからの新年の挨拶の紹介。アカデミーの居室点検。病気のカーズ、ルモワヌへの訪問を決定。複製版画の提示と了承。1月初め土曜が公現祭にあたるので会合を前日にすることを決定。慈善のための献金の集金報告。四半期ごとのメダルを授与する学生の決定。

以上が1752年の1年にわたる記述内容であるが、今回調査した範囲ではどの年も基本的な流れは同様である。1年は3か月を単位として区切られている。この四半期ごとに様々な役割分担が決められ、附属学校の学生たちにメダルが授与される。毎年の重要な行事としては4月にローマ賞コンクールに参加できる学生の決定・8月にローマ賞決定、そしてアカデミーの展覧会（サロン）が開催される年には8月に開幕する展覧会に向けての準備があげられる。これらに加えて随時発生するのが、新会員・新准会員の入会手続き、入会希望者の審査、会員の逝去の報告、アカデミーの人事異動、外部からの各種照会への対応などである。会員が病気になればお見舞いに行くことが決議され、学生に不祥事があれば報告される。さらに毎回ではないが、コンフェランス（講演）と呼ばれる理論的な発表が含まれている。これは1748年5月31日の会合で附属学校の学生にも聴講が許すことが決定されていた。

この議事録からは、アカデミーの活動が根本的には宗教上の規範に従っていることがわかる。会合の日取りが重要な宗教的祝日にあたる場合は、会合を一日ないし一週間ずらしているのが象徴的な例である。年末には慈善のための献金を行ったことが1749年から1756年の議事録に確認できる。毎年11月最初の土曜日（最後の土曜日の年もある）には、死者のためのミサを、前年とそれまでに亡くなったアカデミー会員のために行うことになっている。この行事は重要なもので、早くも1669年8月3日の議事録にかなり詳細に内容が決定されたことが確認できる。⁸

また、上記8月26日の例にも見られるように、王族に関わる重大事の際にはアカデミーとしてミサを挙行している。今回の調査対象にした範囲だけでも、1744年には国王の快癒を祝って音楽アカデミーのド・ブラモンの作曲によりルーヴル宮殿内のサン・ルイ教会においてテ・デ

⁸ P.V., tome I, p.341-342.

ウムの歌ミサを行い、ド・ブラモンには礼として絵画《大洪水》を贈っている。⁹1751年にはルイ15世の孫ブルゴーニュ公の誕生を祝って同じくド・ブラモンにテ・デウムを依頼して絵画彫刻アカデミーとしてミサを挙行している。この時はグランプリ獲得作品と同等の絵画作品から選んでもらい謝礼としている。¹⁰

そもそもアカデミーが成立する際に目指されていたのは、造形芸術を知的な営みとして賞揚し、従来の同業組合という前近代的な仕組みからの脱却することであった。そのため、宴会など懇親的な行事は行わずに美術に関する問題だけを共有する高尚な団体となることがうたわれた。しかし、宗教上の規則や慣習は尊重されたことが確認できる。

宗教が特に問題になる事例としては、新教国出身の外国人の入会希望がある。今回調査した時期だけでも1741年にストックホルム出身のルンドベルク、1742年にプロシア人のシュミット、1753年にスウェーデン人でルター派のロスランとジュネーヴ出身でエマイユ作家のルケが新教徒であるが入会を希望している。いずれの場合についても、外国人会員として入会が許可されているが、アカデミー側は国王からの指示があるからこそその例外的な措置と考えていた。

また、聖職者が愛好家として名誉会員になっている例もあり、1743年にビニヨン師の逝去、1754年にはド・ロウエンダル師の逝去、1756年にはグジュノ師の入会が報告されている。しかし、彼らが宗教美術についてアカデミーで果たしてどのような発言をしていたかは議事録からは不明である。

(2) 学生教育に関する記述の検討

それでは、議事録の記述から宗教画の制作や教育に関する情報はどの程度読み取れるであろうか。まず、学生教育の根幹に関わるのがコンクールである。王立絵画彫刻アカデミーにおいて学生の進捗を促すためにおかれた仕組みがコンクールだった。グランプリとよばれるローマ賞コンクールは年に1度の開催だが、これに加えて3か月に一度の頻度でプティプリとよばれるコンクールがあり、男性ヌードデッサンの出来を評価してメダル獲得者が決定された。¹¹これら二つが附属学校の教育の基本となっている。さらに著名な美術愛好家ケリュス伯は多様なコンクールを提案した。1759年からは「表情」のコンクール¹²、1764年に「遠近法」のコンクール¹³が実施されている。同じく1764年に、実現はしていないものの「骨学」のコンクール¹⁴も

⁹ P.V., tome VI, p.3. この作品は1687年のコンクールで2等となったサン・ポールのもの。

¹⁰ P.V., tome VI, p.293.

¹¹ 議事録によれば、グランプリとプティプリの学生への授与式は常に翌年に行われている。理由は不明だが興味深い制度である。

¹² P.V., tome VII, pp.106-110. 等に詳細が確認できる。このコンクールは二日間で開催され、各日も10時から3時間かけて制作し、当日に審査と表彰が行われた。アカデミーが依頼した女性がモデルとなって、「喜びの混じった感嘆」「苦悩」など年によって異なる感情が指定され、それを表現することが求められた。

¹³ P.V., tome VII, p.241. など。課題作成は遠近法の教授が担当した。

¹⁴ P.V., tome VII, p.249. 1764年4月28日の議事録。ケリュス伯は骨格標本をアカデミーに寄贈さしている。P.V., tome VII, p.271. しかし、このコンクールはケリュス伯の意志で中止されている。P.V., tome

検討された。

これらのコンクールの中で宗教画が課題になる可能性があるのはローマ賞だけだが、その課題についての記述は、今回通覧した範囲ではごく淡々としたものであった。コンクールの最終結果に課題内容が併記されるのみである。1752年の例では8月26日が該当するが、課題の決定時期・決定理由・経緯などについては記録がない。課題がどのような形式で候補学生に提示されたかも記録されていない。

1751年1月12日に決定された規則では、参加者はアカデミーの用意した小部屋で作品を制作して不正を行った場合は失格となること、アカデミーに登録して少なくとも一度プティプリ(3か月に一度与えられるメダル)を獲得した学生のみがコンクールの対象になること、幾何学・遠近法・解剖学の教授からの証明を提出する義務があることを明記しているが、アカデミーから課される課題の決定についての定めはない。¹⁵1758年9月2日の議事録には審査方法が説明されており、匿名での審査が徹底されていたことが分かるが、審査基準については一切触れられていない。¹⁶

実は、今回の調査対象ではないが、アカデミー草創期17世紀の議事録には興味深い記述が見いだされる。ローマ賞ではなく、1663年の素描コンクールに関連するものだ。3月31日の議事録にコンクール課題説明文と推測される記述があるのだ。

「アカデミー会員はめいめい、1日に主題(ルイ14世のダンケルク征服)の記述を書面で持ち寄ること。その中から学生に提示するものを決める」というのである。そして、合わせて「アカデミーの学生たち等のための絵画の主題。フランス王によるダンケルクの征服」と題して、「ダンケルクは寝台の上にいる若い女性の擬人像で表される…まわりには数人のアモールが配されており、一人のアモールはハープを奏で、一人は女性に果物のなかからザクロをすすめている。画面上部にはユピテルとしての国王が鷲を伴って手には雷をもって表される…。周りにはアモールが数人いて花を撒いているが、その中には百合がある。画面下部には老女がいてユピテルの手から落ちる金の雨を受けている…遠くには海が垣間見え、ネプチューンとトリトンたちが見える…」というかなり詳しい記述が続く。¹⁷この文章が誰の作成になるものかは不明ではある。しかし、1666年3月6日や1668年4月7日の議事録に「アカデミーは、ル・ブランに(課題の)説明文を作成することを依頼した」¹⁸という記述があり、国王首席画家でもあるル・ブランが担当した可能性が高い。つまり、17世紀のコンクールではかなり詳細に描くべき内容を指定しており、その説明文をアカデミー会員である画家が作成していると考えられる。

また、1664年9月10日には、コンクールの審査基準が存在したことが推測される文章があ

VII, p.270.

¹⁵ P.V., tome VI, p.256.

¹⁶ P.V., tome VII, p.72.

¹⁷ P.V., tome I, pp.220-221.

¹⁸ P.V., tome I, p.301 et p.330.

る。作品審査の記述の中に「歴史画においては、次の主要な点を考慮すべきである、つまり、1. 主題の配置。2. 全体的な主題の感情表現と各登場人物の個々の感情。3. 人物配置と光に関する遠近法。4. 明確に表されたすべての部分のデッサンとプロポーション。5. 色の配分。」と、絵画を構成要素に分割した考え方が見られる。

これらのコンクール課題の説明文と審査基準は17世紀のものではあるが、アカデミーという組織の保守性を考えると、18世紀時点での仕組みもさほど大きく異なっていなかったのではないかと想像できる。しかし、18世紀については類似の記録は議事録には見出すことができなかった。

続いて、コンクールに至る前の段階、つまり附属学校での教育に関する議事録の記述を検討したい。結論としては、宗教的な主題に関わる記述はまったく見いだせなかった。ひたすら浮き彫りになるのは、生身のモデルを使つてのデッサンがいかに重視されていたかということである。かなりの頻度で議事録にあがるのが、モデル・デッサンを行う際の座席の問題である。まずアカデミー会員の息子たち、そして成績優秀者が優先される決まりであるが、それを徹底させるために、部屋に入る順番までもが指定されている。それでもたびたびトラブルはあったようで、繰り返し問題が報告され、そのたび規則が確認されている。¹⁹ また、モデルのポーズを決定することはアカデミー会員で学校の教授職にあるものの重要な任務であった。さらに、1749年3月29日の議事録に記録があるように、アカデミーのコレクションの古代彫刻をデッサンすることも人数枠はあるものの許されていた。面白いことに、デッサンをした後にその場を片付けて清掃することまで規則に定められている。²⁰

議事録では実技に関する記述が圧倒的に多いが、学校では理論的な講義も提供されており、今回の調査範囲の中では、遠近法と解剖学について教授職の人事に関する言及が確認できる。しかし、宗教的な知識についてはまったく記述がなかった。

また、教育の場としてはアカデミー附属学校とは別の組織も存在する。ローマ賞を獲得した学生を対象に、イタリア留学の実を上げることが目的として1748年に創立された「王立特待生学校」である。その教育内容については「歴史・物語 (Histoire)、寓話 (Fable)、幾何学、そのほか絵画に関係する知識」とされているが、これらに聖書の知識が含まれるかどうかは明言されていない。また、1748年議事録の末尾に付随しているこの学校の規則の9条は、物語から構図を作り出す練習について触れており、「学生が歴史や物語の出来事を読んで絵画に適した良い主題があった場合、エスキス (構想図) を作ることは奨励される。彼らの才能を発揮させるのみならず記憶にその出来事を刻み込むのに役立つであろうから。学生はこれらのエスキスを毎月最初の土曜日にアカデミーに提示し、その物語の概要を自分で書いたものを読み上げること」

¹⁹ たとえば1754年1月5日の議事録では、3か月ごとに許可証を更新することが確認されている。P.V., tome VI, p.377. 1761年4月4日にはさらなる秩序を求めて規則が改定されており、モデル・デッサンの場所取りがいかに重大な問題であったかが分かる。P.V., tome VII, p.162.

²⁰ P.V., tome VI, p.161-162

と述べている。²¹ここで宗教画を手がける可能性もあるが、実際にどのような指導が行われたかは不明であるし、すでにローマ賞を通過した段階でのカリキュラムということになる。

また、アカデミーの会合の際に行われたコンフェランス（講演）も、学生が聴講できたもので、教育の一つの場といえる。講演をしたのは画家や彫刻家だけではない。アカデミーには愛好家も会員と所属しており、1752年の議事録にワトレやケリュス伯の名前が見られるように、たびたび理論的な考察を発表した。18世紀中葉にはむしろこれら愛好家の存在感は大きい。このコンファレンスに宗教画に関する考察が含まれているかどうかも確認したが、残念ながら今回調査した範囲では明確な記述は見いだされなかった。

3. まとめに代えて

以上のように、1741年から1765年の王立絵画彫刻アカデミー議事録の記述には、アカデミーの中で宗教画の制作と教育についてなされていた指導を明確に示すものはなかった。とはいえ、17世紀の記述を参考にしながら、ローマ賞の課題の提示方法に示唆を得ることができたのは、ささやかな成果であった。

そもそもの出発点の一つは、フラゴナールがアカデミー附属学校での学習無しにグランプリを獲得できたのはなぜなのか、ということであった。議事録で見る限り、ローマ賞課題—聖書のテキスト、あるいは何らかの説明文に沿って、新たな構図を創作する—に対応するような教育プログラムがアカデミー附属学校に存在したとは考えにくい。また、とくに宗教画に特化して、内容の適切さを教授するような仕組みがあったかどうかは疑問である。

学生たちは、学校で教えられるよりもむしろ、前例となる作品を観察することによって、コンクールで要求される諸要素を学んだ可能性もある。公明正大さを期すため、毎回のローマ賞コンクール参加作品は8月25日には公開されており、その審査結果も明らかにされていた。またその優勝作品や、入会時に画家たちが提出する作品はアカデミーに保管され、おそらく手続きを踏めば見ることができる状態になっていた。高く評価される作品とはどういうものか、実物を見て考えることは可能であった。このような状況であれば、フラゴナールはそれほど不利ではなかったのであろう。

しかし、アカデミーの附属学校に学んでいないということが影響するのは、むしろ一人立ちしてからであったかもしれない。ローマ賞を受けて、フラゴナールは新設の王立特待生学校、ローマのフランス・アカデミーに学び、1765年にはアカデミーに准会員として入会する。このときの作品《コレシユスとカリロエ》（ルーヴル美術館所蔵）は大好評をもって迎えられた。しかし、彼はアカデミーの正会員にならずに活動する道を選ぶ。絵画市場の拡大により、個人の愛好家を確保すれば生活は十分成り立ったというのは一つの理由だろうが、それだけではない

²¹ P.V., tome VI, p.148.

ように思われる。

議事録の検討から改めて明らかになったのは、フランスのアカデミー絵画がいかに言説中心の構造を持っていたかということである。これを象徴するのが1667年から営々と続けられてきた「コンフェランス」(講演)である。²² 今回の調査範囲でも錚々たる愛好家たちが自説を披露する場となっていた。アカデミー会員たちは、自ら理論的考察に手を染めるものはごく少数であったとしても、絵画を分析し言語化することには日ごろから慣れ親しんでいたであろう。そして、この手続きは逆向きにも働く。課題となる聖書テキストや文章から、絵画作品を紡ぎだすというローマ賞のありかたは、フランス・アカデミーにおいていかに絵画が言説と一体化しているかを示している。

また、フランス革命前のアカデミーは19世紀の教条的なものとは異なり、自由な雰囲気を持っていたと言われるが、それでも中央集権的な絶対王政の組織である以上官僚的な性格は強く、それは整然と記録された議事録からもうかがえる。すべてが言語化されて記録されることが目指されていた。また、附属学校においてコンクールという手段で学生を採点して序列化し叱咤激励する方法は、フラゴナールが准会員になる直前の時期に特に活発化している。アカデミー会員になれば、この制度を運営・維持する立場にならなくてはならない。自分自身がこの特殊な制度を十全に体験していないということが、フラゴナールに心理的なハードルを感じさせたということは大いにあり得るように考えられる。

今回の調査は宗教画制作の教育という問題が出発点であったが、議事録という具体的かつ地味な記録をもとにして王立絵画彫刻アカデミーの在り方を改めて考察する機会となった。本来造形芸術を知的営為として確立することが目的であったアカデミーだが、組織として整備され、様々な業務を実際に遂行していく中で、制度であるがゆえの束縛を露呈していく様子は示唆的であった。このアカデミー議事録は膨大な資料ではあるが、今回調査対象としなかった期間についても、今後継続して検討していきたい。

²² コンフェランスについては、Alain Mérot, *Les Conférences de l'Académie royale de peinture et de sculpture au XVIIe siècle*, Paris, 1996. また、草創期のコンフェランスが宗教画に集中していることに着目した考察として、大野 芳材「1667年の「コンフェランス」：宗教画事始」、『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第12号、2004年、pp.129-146.

